

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K01077

研究課題名(和文) 沖縄本島における南北格差の歴史民俗研究

研究課題名(英文) Differential between south and north area of Main Island of Okinawa

研究代表者

古家 信平 (Furuie, Shinpei)

筑波大学・人文社会系(名誉教授)・名誉教授

研究者番号：40173520

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：『琉球国由来記』巻1, 5と巻12から15までの記述から拝所の構成、祭祀への供物の負担者等を取り出し検討した結果、沖縄本島中・南部と北部との間に当時の社会組織の違いを反映する格差を見出した。これと並行して実地調査を行い、北部で集落単位に広く分布している公的祭祀場であるアサギの南限が旧コザ市域にみられた。神役による祭祀が行われているという北部的要素がみられる一方、門中の施設が周囲に配置されるなど南部的要素も見られ、南北の民俗文化の移行地域の様相があきらかとなった。また、首里城火災に対する反応から沖縄本島南北の認識の差、そこからさらにかつての支配・被支配を背景とする格差を垣間見ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの沖縄の歴史民俗研究は琉球王府編纂による制約の大きい史料を中心に進められており、本研究のような沖縄本島中・南部を一つのまとまりとし、北部および与論島・沖永良部島をそれに対する別のまとまりとして把握する立場は一般的ではなかった。その背景としてアカデミズムの世界において「南部沖縄中心史観」ともいえるべき偏見が主流となっており、しかもそのことが意識されることなく受け入れられてきたことがあげられる。それに対して、本研究では琉球王府編纂史料を再検討し、それと現在の民俗事象を対照することにより、南北の格差を明らかにし、そのことを意識すべきことを主張した。

研究成果の概要(英文)： The examination of "Ryukyu-oku yuraiki", such as the composition of places of worship and the bearers of offerings to rituals, revealed differences between the northern and central/southern parts of Okinawa Island, reflecting the differences in social structure at that time. In parallel, a field survey disclosed that the southernmost location of "asagi" was the former Koza City area. This area demonstrated the northern style of rituals conducted by priests at "asagi". The southern aspect of the "asagi", where the facilities of the monchu (a patrilineal kingroup) are located around the "asagi", represented a transitional zone between the northern and southern folk cultures. In addition, a study of reactions to the Shuri Castle Fire in 2019, based on newspaper articles and other sources, revealed differences in perception between the northern and central/southern parts of main island of Okinawa, hinting at an underlying historical dominant-subordinate relationship.

研究分野：民俗学

キーワード：『琉球国由来記』 格差 門中 祭祀組織

## 1 研究開始当初の背景

沖縄に対する日本本土との間に見られる差別、あるいは沖縄から奄美・宮古・八重山に対する差別については、これまでに指摘されており、実態が知られていたが、沖縄本島内の北部に対する中・南部からの差別については意識されることがほとんどなかった。こうした状況はアカデミズムにおいても、琉球史の記述の中で北部地域を文化的に劣ったものとしたり、反首里王府の反乱を恐れていた時期にすでに北部を含めた琉球意識が形成されていたととらえるなど、処々に見ることができる。それらは無意識に行われていることが問題とされる。これは一般的に言われるように歴史が勝者のそれであり、そのことを自覚して歴史をとらえようとしないと犯しがちな誤謬である。民俗調査報告書にはこうした誤りの修正を迫るデータが存在するが、それらを意識的に整理してこなかった。

## 2 研究の目的

沖縄本島の北部に対する中・南部からの差別の実態を民俗資料と地域の歴史の叙述を用いて明らかにするとともに、その要因を探る。北部と中・南部の境界は旧コザ市（現在の沖縄市）から恩納村あたりに引くことができる。現代において北部と中・南部の人々の「琉球」に対する感情を明らかにし、差別の背後にある心意を指摘したい。『琉球国由来記』各処祭祀篇の記述は旧コザ市域あたりで変わるので、王府での編纂から300年間の歴史的变化を考慮しつつ、地質、動物、植物の展開にも配慮しながら領域を確認したい。また、考古学の成果からオキナワウラジロガシの分布が北部に偏り、それが保存食となっていたことから、さらに時間をさかのぼった段階での北部地域の位置づけについても考えてみたい。

## 3 研究の方法

研究課題に迫るために文庫作業として二つのこと、新聞資料の検索と『琉球国由来記』各処祭祀篇の記事の検討を行った。沖縄の「琉球新報」と「沖縄タイムス」の記事から2019年の首里城火災に関するものを抜き出し、投稿者の年齢、住所、職業などの属性と記事の内容を分析し、北部と中・南部の人々の心意を明らかにした。『琉球国由来記』は18世紀の地誌でまず、当時の日中関係を踏まえて史料としての性格を再検討する。さらに現在の聖地、年中行事、供物などにある程度比定できることから、民俗資料との対比を行い、北部と中・南部の特徴を明らかにした。もう一つは、初年度はコロナ禍により実施できなかったが、2年目から現地調査を行い、文庫作業で指摘された点を現地で確認するとともに、現地の人々の間で伝えられてきた伝承を聞き取り、新たな発見につなげた。ただ、2年目もコロナ禍のために受け入れ側の事情により十分な調査はできなかったこともあり、3年目には年中行事も徐々に復活してはいたが、フィールドワークには制約を受けざるを得なかった。

## 4 研究成果

新聞記事から見る南北格差に関しては、今回の資料としたのは『琉球新報』と『沖縄タイ

ムス』である。『琉球新報』は2019年の発行部数155000部（公称）で、もう一つの新聞『沖縄タイムス』とほぼ同数を発行している。沖縄本島と周辺離島地区はほぼこの2つの新聞社で独占状態にある。2019年10月31日の首里城火災に関する記事を時系列に従って取り出し、首里城火災に対する本島中南部と北部の人々の受け止め方の違いを読み取り、沖縄本島における南北格差を明らかにしたい。

投稿の件数は沖縄中南部は2019年と2020年の2年分合わせて『琉球新報』61件/『沖縄タイムス』89件、沖縄北部は2年分で3件/4件と新聞購読者数の比率よりも大きな差が出た。投書数が首里城火災への関心の程度を示すものであるならば、北部の人々の無関心さを表していると言える。

投稿の内容をいくつかに分類して検討したい。

#### （1）第1類型 「個人ベース」

第1の類型は、個人の生育歴と関連付けて記述されるものである。これを「個人ベース」とする。事例は、10代の高校生から101歳の男性まで満遍なく、地域も南部から北部まで広がっている。北部からは2例で、飼っていた牛が気になって自分だけ行かなかったことを後悔しているという名護の女性と、個人的な感覚では深刻に受け止められなかったという伊江村の男性である。伊江村の男性は海を隔てているし、首里までは距離もあり、実感をもってとらえられなかったということであろうか。確かに伊江島も名護も日常的な暮らしの中に首里城が入り込む余地はほとんどなさそうである。それは中南部の人々が散策やジョギングで生活の一部にしていたり、自治会、婦人会などの催しで訪れたり、北部に比べれば身近であることと対比できる。「個人ベース」でも地域的な格差はうかがうことができる。

また、家族・親族と関連付けるものが少数ながらあって、投稿者を中心として祖母、娘、孫とのあくまで個人的関係で語られている。政治的文脈に関連付けるものはなく、若い頃の思い出、趣味など日々の活動とのかかわりの中で首里城火災にふれている。

#### （2）第2類型 「家族・親族・門中ベース」

第2の類型として家族・親族とのかかわりで首里城火災にふれるものについて見ていきたい。これを「家族・親族ベース」と称しておく。沖縄においては「家族・親族・門中ベース」としてもよいだろう。結論から言うと、今回収集した中にはこの類型に入る事例は存在しない。アガリマーイで園比屋武御嶽を拝するので首里城に行っているはずだが、言及されない。首里城は祭祀対象ではないが、門中の代表として巡拝する際には訪れているはずなのだ。尚王家や王府の身分を持っていた門中が登場する時代ではないにしても、門中の儀礼に首里城の位置づけはどうなっているのだろうか。

#### （3）第3類型 「集落ベース」

第3の類型として集落との関わりをあげる。シマンチュという言葉があるように、特定の集落の出身であることが強調されることがある。これを「集落ベース」と称しておく。字誌でも初めに集落の特徴として、シマンチュの性格を記してある。シマクトゥバ（島言葉）

というように、隣の集落とも微妙に言葉が違っているとも言われる。全島エイサー大会に出てよい成績を上げたとか、綱引きでどこの組が勝ったとか、部落の人の性格からして教員や警察官になることが多い、というような脈絡で「集落」は取り上げられる。この類型も、今回収集した中には事例が見当たらない。琉球国時代には村請制度があったので、集落は間切を通して首里王府につながりを持っていたが、それは過去のものになっている。首里城火災の話題と集落は関連づけられない。

#### (4) 第4類型 「地域ベース」

第4の類型として、本科研の課題と関連する地域とのかかわりである。本島北部と中南部に首里城火災の取り上げ方に相違がみられるかどうか。これを「地域ベース」と称しておく。

北部からの投書は、心情としては以下の中南部の人々の表記に比べると中立で、思い入れが少ないといえるだろう。これに対し、中南部の投書にはウチナーンチュ、琉球人、琉球＝沖縄、琉球の魂、沖縄のこころ、ウチナーンチュの心、アイデンティティー、心のよりどころと、首里城をめぐる表現が多彩である。祖先が士族というよりも、中南部の地域の人々が先に上げたウチナーンチュ以下の表現を使うのは、この地域に住む人々に共有された心情がそのような表現を通してあらわになった、とみるべきであろう。

以上、4つの類型を設定して新聞記事を分析した。一般の読者の投稿は新聞社の編集部で加除、修正がなされるので、表題をはじめ象徴的表現などに画一化がみられることや、両新聞社の編集上の方針の違いが読み取れるところもあり、そうした点の検討はさらになされなければならない。

次に、『琉球国由来記』編纂の目的と「祭祀篇」の記述について検討した。

『琉球国由来記』の巻12から15に記された、沖縄本島の各間切における御嶽と拝所については、22年度にすべて入力終了した。さらに22年度、23年度には、21年度には不可能であった現地調査を実施することができた。これによって、北部の本部町および名護市、南部の糸満市、南城市などで、各地の御嶽・拝所とその祭祀、綱引きなどの行事を調査し地域差の実態をつかむことができた。『琉球国由来記』のデータに関しては、当初の予定ではこの後、データベースソフトに格納し、さらに検索プログラムを組む予定であったが、その前に二つの作業を進めるべきことが明らかになった。

一つは『琉球国由来記』が記している御嶽に関するデータの性格を明らかにすることである。もう一つは巻12から巻15に見える拝所で行われる年中祭祀に関する記述には、どのような供物を誰が用意するのかを詳細に記されている。これに関して、各地域における供物の分布の特色、また百姓、地頭、宗教者の分担の地域差が存在していることを検討することである。

序文に関する考察では、まず巻1の「諸事由来記序」と題する文章ほかから考察すると、礼の方面、特に「禁城諸公事、及毎年毎月、所有儀式、其所由来者」に重点があることは明

確である。『琉球国由来記』(以下『由来記』)について、伊波普猷氏は「琉球の延喜式とも云ふべきものである」としたが、内容を見る限り礼・祭祀の部分に重点が置かれていることは否定できない。一方で島村幸一氏は「『由来記』はその名が示しているとおり、由来を中心に据えた広い意味での地誌と考えた方がより妥当であるとしている。しかし中国で『由来記』が成立したころ盛んに編纂されていた地方誌とはかなり構成を異にし、その内容は礼や祭祀に重点を置いたものという明確な特色を持っている。

一般に中国の地方誌、特に盛んにそれらが作成された明清時代のものは、すでにそのスタイルが確立され、同じ様な内容を備えるようになっていく。これと比べると『由来記』は、「典礼志」の内容を主とするものであることは明らかであり、中国の祠廟にあたる御嶽や拝所、そしてそこで行われる儀礼、供物などに重点が置かれている。そのほかに「職官志」に当たるものは存在している。しかし「田賦志」は人口や税収を把握するためには、不可欠のデータであったはずである。これを欠いているのは、おそらく薩摩の支配下にあった琉球政府としては、これを明らかにすることには差しさわりがあると考えたのではなかろうか。また『由来記』の「事始」は、中国の一般の地方誌にはあまり見られないものであるが、かなり力を入れて記述している。

巻3・4「事始」の部分は琉球に見られる様々な事象について、その起源や変遷をたどる記述がなされている。本研究では『琉球国旧記』(以下「旧記」)の巻四「事始」の記事との比較から、この記事の特色を考察してみた。

記事の中で、中国や日本から伝えられ、琉球に広まったという事情を述べた部分が見られるが、この記述については、『由来記』と『旧記』で大きな違いは見られない。王の事績であっても、中国の年号の後に続けてその事績を述べている。これは『旧記』でもその順番がとられている。

『由来記』に『中華事始』および『大和事始』を引用しながら、琉球における起源と変遷を述べたのに対し、『旧記』では引用を一切省いている。さらにこの時代の琉球では、距離から言っても日本との往来より、対岸の清との往来の方が簡単であったはずである。そして中国語や漢文を理解できる人も多かったと考えられる。それなのになぜ琉球国の事情との比較に、『中華事始』、『大和事始』という和書を使ったのか。ちょうどこのころ中国では、事物の起源と変遷を論じた『格致鏡原』という類書が成立している。『由来記』の編纂に間に合ったかどうかは、さらに詳細に調査してみないと微妙な年代ではあるが、中国に関しては中国の類書を用いても良かったはずである。それでも二つの和書によったということは、これはもともと、この「事始」の編纂においては、二つの「事始」に示された方法に倣って、琉球国における起源と変遷をたどることが主眼であり、中国と日本のことは付け加え、あるいは対比として掲げたに過ぎないことを示しているのではなかろうか。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 武井基晃	4. 巻 19
2. 論文標題 沖縄の清明祭のお供えと墓の今後	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 比較日本学教育研究部門研究年報	6. 最初と最後の頁 16 - 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古家信平	4. 巻 19
2. 論文標題 沖縄の火の神、仏壇、墓、御嶽から先祖祭祀を見る	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 比較日本学教育研究部門研究年報	6. 最初と最後の頁 7 - 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 武井基晃	4. 巻 1
2. 論文標題 姓の継承・創設 近世琉球の士の制度と、近代沖縄のシジタダシ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東アジアは「儒教社会」か？ アジア家族の変容	6. 最初と最後の頁 141 ~ 167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武井基晃	4. 巻 234
2. 論文標題 葬儀における難儀の顕在化 岩手県北上市の葬式組の動揺と維持	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 395 ~ 413
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 武井基晃
2. 発表標題 家譜を書き残す子孫たち 沖縄の自費出版・私家本を中心にー
3. 学会等名 歴史人類学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 武井基晃
2. 発表標題 清明祭の墓参を中心に 新暦と旧暦ー
3. 学会等名 お茶の水女子大学国際日本学シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古家信平
2. 発表標題 沖縄の火の神、仏壇、墓、御嶽から先祖祭祀を見る
3. 学会等名 お茶の水女子大学国際日本学シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 武井基晃
2. 発表標題 琉球王府の家譜制度と儒教ー新たな姓・家系の成立の仕組みを中心に
3. 学会等名 比較家族史学会春季大会シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 森田真也 城田愛	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 253
3. 書名 踊る「ハワイ」・踊る「沖縄」	

1. 著者名 関沢まゆみ (武井基晃)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 209
3. 書名 講座日本民俗学 4 社会と儀礼 (南西諸島の人生儀礼)	

1. 著者名 新谷尚紀 (武井基晃)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 244
3. 書名 講座日本民俗学 3 行事と祭礼 (南西諸島の年中行事)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松本 浩一  (Matsumoto koichi)  (00165888)	筑波大学・図書館情報メディア系(名誉教授)・名誉教授   (12102)	



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	武井 基晃  (Takei motoaki)  (00566359)	筑波大学・人文社会系・准教授    (12102)	
研究分担者	森田 真也  (Morita shinya)  (10412686)	筑紫女学園大学・文学部・教授    (37117)	
研究分担者	神谷 智昭  (Kamiya tomoaki)  (90530220)	琉球大学・国際地域創造学部・准教授    (18001)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関